

クリスチャンとインターネット ～聖書的倫理観の成熟を目指して～

日本フリーメソジスト桜井聖愛教会、
大澤 恵太

1、はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大以降、日本のキリスト教会でインターネットの利用が急速に広がりました。その現象を日本キリスト教会のIT(情報技術)革命と呼んでも、決して大げさではないでしょう。礼拝がオンラインで配信されるようになり、多くの会議がオンラインで行われるようになり、教会内外の集会やキャンプまでもがオンラインで開催されるようになりました。感染症の終息前と終息後のインターネットの利用のされ方が同じではないでしょうし、終息後速やかに元通りの教会の様式に戻るというわけではいでしょう。そのような状況の中で、発題者は、教会におけるオンライン礼拝の在り方について継続的に考え、発信してきました。そうした中で感じた一つのことは、教会とクリスチャンがインターネットというものに対して、どのように向き合えばよいかという倫理的な整理が急務であるということでした。もちろん、これは感染症の有無に関係なく、それまでもずっと課題であったことでした。しかし、これだけ広範囲のキリスト教会でIT化が進んだ今、キリスト教会全体でこの課題に真摯に向き合わなければならないタイミングを迎えているように思います。

ここで「倫理」という言葉を使いました。人間同士が生活している中で善悪を判断するための一定の規範、それを倫理と言います。ここであえて「倫理」という言葉を用いているのは、それが私たちの生活に密着したレベルで考えられなければならないことだからです。ここに、今や私たちの生活からだけでなく、教会の活動からも手放しにくいものとなりつつあるインターネットの聖書的倫理観について考えるチャレンジをしてみたいと思います。発題者自身、ここに足を踏み入れてある程度の形のものとして提示するというのは、無謀なことのようにも感じています。それだけ幅広いフィールドであり、取り扱うべき課題が無数にあります。しかし、水の上にパンを投げれば、波紋ができるだろうとの期待を込めて、とにかくこの課題に向き合いたいと思います。もちろん、「これが道だ、これに歩め」といった類のことをここでするつもりはありませんし、それは倫理とは呼びません。倫理とは、一人一人が共に考えながら行動することによって共に築き上げていくものです。このところでの一つのチャレンジが今後の議論のたたき台となるならば、発題者としてそれに優る喜びはありません。

初めにお断りをおしますが、発題者は情報技術やネットリテラシーの専門家ではありません。専門的な視点で見ると、粗いと感じる部分が多々あるかと思いますが、聖書的価値観を知っている者として、インターネットの脅威や向き合い方について感じていることを共有することができればと願っています。

2、聖書における情報伝達手段としての派遣

まず、聖書における情報伝達がどのようなものであったかということを考えてみたいと思います。聖書における情報伝達の手段は、旧約聖書でも新約聖書でも、基本的には口伝と筆記です。そこに、時に足による移動というものが伴います。ここでは、特に使いを送るということについて考えてみたいと思います。聖書において、自ら出向くことの重要さは自明のことであると同時に、使いを送るということが、それと同様に重要なものとされていると考えられます。アブラハムとロトのもとには、神から遣わされた人が訪ねてきました（創世記 18～19 章）。モーセは長くエジプトに住んでいた人ですが、主なる神はあえて一時的に彼をエジプトから離れさせてから「今、行け。わたしは、あなたをファラオのもとに遣わす」と言われています（出エジプト 3:10）。ダビデがバテ・シェバに関して姦淫と殺人の罪を犯した後、「主はナタンをダビデのところに遣わされ」ました（サムエル第二 12:1）。イザヤが神から預言者としての召命を受け取るときにイザヤに語られた言葉は、「だれを、わたしは遣わそう。だれが、われわれのために行くだろうか。」というものでした（イザヤ 6:8）。

新約聖書でも、イエスは十二人の弟子を遣わし（マタイ 10 章）、また七十二人の弟子を遣わします（ルカ 10:1）。アナニヤは、イエスと会う体験をして目が見えなくなったパウロのもとを訪ね、自らはイエスから遣わされてきたのだとパウロに語りかけました（使徒 9:17）。パウロとバルナバは、アンティオキアの教会から世界へ伝道のために手を置いて祈られ、派遣されていきました（使徒 13:1～3）。そして何よりも、イエスご自身が自らは神から遣わされてきた者であるということは何度も語っています（例：マタイ 10:40、ルカ 4:18～19）。

派遣された者は、派遣した者の存在をリアルに表す存在です。派遣されていく者の体温が、派遣する者の存在をリアルに表すのです。この派遣に伴う体温ということに、注目したいと考えています。聖書において重要な局面で人が派遣される時、その背後に神がおられることが示されています。ここに聖書における派遣の重要さがあります。聖書は、ことあるごとに重要なメッセージが派遣によって伝えられたことを示していますが、その背後には神がおられ、ご自身の存在と熱心を現わすために、神がある人を遣わされているのです。そして、時いたって神の愛をリアルに伝えるために、イエス・キリストがこの地上に遣わされました。私たちは、イエス・キリストが人となってこの地に来られたということのインパクトを、決して忘れてはなりません。神であられるお方が、人の肌の温かさをもって、体温を持つお方としてこの地上に来られ、仕える者となってその手で人々に触れ、神の国を現されたのです。使徒ヨハネは、このインパクトを「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」（ヨハネ 1:14）と表現し、「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことば」（ヨハネ第一 1:1）と表現しています。

神は、私たち一人一人をも用いることのできるお方です。週ごとの主日の礼拝は、神のもとから私たちがそれぞれの場所に派遣されていく派遣式でもあります。私たちが神によって今いる場所に遣わされているのだとするならば、私たちの言葉が、私たちの体温が、神ご自身を指し示すものとなります。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです」（ヨハネ 5:17）と言われたイエス・キリストが、私たちの最も良い模範です。私たちが誰かに何かを伝える時に、私たちの伝える情報がこのキリストの受肉のインパクトに感化されたものであ

るかどうか、体温を伴う“言葉”となっているかどうか、そのことを考えたいと思います。

3、コロナ禍での牧会経験から

2020年から日本でも始まった新型コロナウイルスの感染拡大は、教会にも重大な影響を及ぼしました。発題者の教会では、2020年2月より礼拝の動画配信を試験的に開始し、翌3月よりインターネット礼拝という言葉を用いて、本格的に配信による礼拝を提供し始めました。2020年4月7日、最初の緊急事態宣言を受けて、4月12日よりしばらくの間、会堂への来会に対する全面的な自粛措置を取り、牧師家族と数名の奉仕者のみが会堂に集い、配信のための礼拝を行うという状況になりました。その後、役員は来会可とするという若干の変更はありましたが、緊急事態宣言期間を中心に、何度か同じような自粛措置を取っていました。

教会が教会員に対して会堂に集まらないようにと呼びかける異常な状況の中で、牧師としてできる限りの対応を取りました。牧会的な情報の共有のために印刷物を増やし、インターネット環境がない方のために録音のための礼拝を火曜日に行い、週報等の印刷物を水曜日までに整え、各自の必要にそって袋詰めした配送物を、木曜日に牧師が教会員宅を巡回して配送。礼拝がフルリモートになってしまった分、宛名を全部手書きにするなど、できる限りぬくもりを感じられる牧会対応に努めました。その中で、コロナ以前にはなかった平日の教会員とのやり取りが増え、また献金収入が増加するようになり、教会を支えてくださるお一人お一人の教会員の姿勢が見えるようになり、改めて心と心が通じ合う牧会の大切さを教えられたような思いでした。

礼拝に関しては、会堂に共に集まって礼拝できることの恵みを再確認し、またお一人お一人の体温を感じながら御言葉の取り継ぎをさせていただくことができる喜びを再確認しました。その中で感じたことが、キリストの受肉の恵みでした。神であられるお方が人となって、人の肌の温かさをもってこの地上に来て下さり、この地で人々に仕える僕となってくださった。福音に立って生きる者は、そのインパクトを決して忘れてはならない。共に体温を感じながら集まって礼拝をささげている時に、私たちはキリストが人としてこの地に来てくださったという受肉の恵みを体験しているのだということを痛感しました。それ以来、キリストの受肉の恵みが自分自身の牧会の在り方の根底に、クリスチャンとしての在り方の根底に据えられるようになりました。

4、インターネットの脅威

インターネットには脅威が潜んでいるということは、今や誰もが認識していることでしょう。では、いったいインターネットの何が脅威なのでしょう。そのことを明確にしておくことが、インターネットにおける倫理の形成のためにどうしても必要なこととなります。発題者は、YouTubeなどの動画サイトを含めてインターネットをさかんに利用している者であり、SNSの使用(Facebook、Twitter、LINE、Instagram、Clubhouse等)、zoom等によるオンライン・ミーティング、Podcastによるインターネットラジオの配信(Anchor)などを日常的に行っています。しかし、インターネットの分野における専門性があるわけではないため、足りない部分も多いとは思いますが、以下にインターネットの脅威をいくつかに分けて大雑把に挙げてみたいと思います。

・人間による「つぶやき」そのものの脅威

SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)の普及により、一個人が“つぶやき”と称して日常的に感じたことを自由に発信し、キャッチできるようになりました。画期的だったのは、Twitterの普及です。140文字以内と文字数を制限することにより、日常の中で感じる個人的な感情や考えなどがかなり細かく刻んで切り出されるようになりました。一人の人の瞬間的な“つぶやき”が生活のままの言葉でリアルタイムに発信されるようになり、それが一つの情報としての価値を持つようになっていくのです。しかし、聖書は、「舌は火です。不義の世界です。」(ヤコブ 3:6)と言います。実際に人間の心に湧いてくる「つぶやき」は、良いものばかりではなく、時にネガティブな言葉や暴力的な言葉も起こり得るのです。そういったものまでもが、理性のフィルターにかかることなくインターネット上に流れてしまった場合には、それが誰かを傷つける表現として受け取られることもあります。聖書は、「人の心が思いはかることは、幼いときから悪である」(創世記 8:22)と言っていますが、人の罪悪性というものは、その人の“つぶやき”の恐ろしさに直結するものです。“つぶやき”が全世界に発信されるということそのものの脅威というものを、SNSを利用する者は理解しておくべきでしょう。

人が内面に持っている攻撃性が、インターネットを介することによって取り返しのつかない結果を生み出すことがあります。「デジタルタトゥー」という言葉が生まれるほど、その問題は深刻なものとなっており、一時の感情によってとった行動が、一人の人の人生を狂わせることになることにもなりかねません。このようなことを考える時、インターネットと向き合うことは、人の内にある罪性と向き合うことに直結するのだということを知らされます。

・相手が「見えない」ことによって生じる脅威

また、インターネットで情報を発信する際には、発信側と受信側の相互が目に見える場所に行かないことがほとんどです。しかも、当然のことながら、書く字が上手か否かに関わらず、発信する者の感情にも関わらず、いつでもどんな時でも誰でも、文字は同じデジタルな書体で受け取られることになります。つまり、そこに体温に代わる要素が何も表されないのです。このことは、いくつかの不都合を生み出します。第一に、情報を発信する際の責任感を薄れさせます。私たちは、誰に語っているのかということ具体的を知るによって、相手に対する配慮をもって語ることができるようになります。しかし、相手が見えないとそういった相手に対する配慮や責任感を持つことがしにくくなり、そうしてそういった配慮そのものが軽視されていくようになってしまいます。

第二に、相手が見えなければ、偽りが横行しやすい状況が生まれます。その情報を発信しているのが自分であるということを示さないということが可能であるため、発信者が素性を隠したまま意図的で悪意のある発信をしたり、別の人になりすまして情報を発信したりすることが可能になってしまいます。また、一人の人が複数のアカウントを作って二重人格的な発信がされることも増え、闇が深くなっています。

第三に、相手が見えないということの中で、結果として、情報の正確性や倫理性などに関して混乱が生じ、受け取り側にとってどの情報が安全なものなのかがわからなくなります。情報が多様化し、また情報過多となっていく中で、情報の正しさそのものが曖昧になってしまいます。また、著作権、肖像権、個人情報の保護に関する法整備の困難さもあり、受け取っても良い情報が

否かの判断を複雑化させています。

相手が見えないということに伴うこれらの不都合が、犯罪やいじめ等に利用されることがあるのが現実です。教会がインターネットを活用するのであれば、伝道の可能性といった良い面ばかりでなく、この現実に対してどのように向き合うのかということにも真摯に考える必要があります。インターネットは活用するけれど、そういっためんどくさいことは考えないというのは、福音を預かっている教会のあるべき姿ではありません。

・資本主義による脅威

また、資本主義による脅威というものがあります。資本主義とは、すべてのものの価値をお金で換算し、売買を行うことによって社会を動かす経済システムのことを指すのですが、このすべてのものの価値がお金に換算されるという考え方が、聖書とは異なる価値観であると言わざるを得ません。そして、この資本主義的な考え方がいくつかのインターネットにおける脅威を生み出しています。第一に、利益至上主義の人々によって、不必要な情報がさかんに売り買いされたり、詐欺などの不法が行われたりということが日常化してしまっています。人権を無視した個人情報の売買、ポルノサイトなどを利用したコンピュータウィルスの拡散、詐欺などを目的とした不特定多数へのメール送信、様々な問題があります。

第二に、インターネットの利用によって資本主義的世界観に触れることが日常化することによって、人をモノとして見るのが当たり前になってしまいます。資本主義では、労働力だけでなく、人そのものも商品化されます。また、商品化までいかなくても抽象的な存在として人を捕らえることに不自然を感じないようになります。ポルノサイトはその最たるもので、女性をモノとしてしか見ていません。殺人をゲームのように感じる人によって凶悪な犯罪が起こることがありますが、それは自分以外の命をモノとしてしか見ていないからできることです。もちろん、インターネットを利用せずとも、社会そのものが資本主義に染まっているのですが、人と人との接触があるかないかということには、大きな差があります。インターネットの利用が中毒的であればあるほど、人が人の肌のあたたかさを見失う、生と死、愛と喜びの尊さが失われていくという危険性が高くなっていきます。インターネットによって、情報だけでなく、犯罪も氾濫するようになったというのは、決して言い過ぎではないように思っています。

・人間が絶対に追いつけない速さと広さという驚異

インターネットによって情報が伝わる速さと広さもまた、人間にとっては脅威です。時代が進めば進むほど、インターネットの速さは増しており、今やその速さは絶対に人間の対応が追いつくことのできないものになっています。それが、利便性を生む一方で、脅威にもなっているのです。人間がインターネットの速さと伝わる範囲の広さに決して追いつくことができないならば、情報が発信される前に最大の準備を整えておくしか対策はありません。発信する情報に誤りがないか、その情報が拡散されることによってどのようなことが予想されるか、段取りの順番はあっているか、様々なことを整えておかなければ、準備が整っていない状態でボタンを押してしまうと、その瞬間に情報は人々のもとに届けられ、それをなかつたことにはできなくなってしまうのです。出発時の不備を許さないその速さと広さは、やはりそれそのものが人間にとっては脅威と

言えます。

5、教会における聖書の倫理観

そのような脅威をも抱える一方で、もちろん、特にその速さと広さという点はインターネットの大きな利点でもあります。極端なデメリットとメリットの両方を含むこのインターネットというものに対して、私たちはどのように向き合っていけばよいのでしょうか。ここでは、教会という共同体としてのレベルと、個人としてのレベルとに分けて考えてみたいと思います。どちらに関しても、様々な考え方があり、課題となるすべてのことをフォローできるわけではありません。それでも、聖書の世界観をもってインターネットと向き合うということのために、教会において、また個人において議論が進められるように願いつつ、大雑把にトピックを取り上げて見たいと思います。

なお、ここではインターネットとの向き合い方という広いテーマを浅く見ていくこととなりますが、「教会とインターネット礼拝」という個別のテーマとしては、月刊「いのちのことば」の2021年10～12月号にて連載コラムを書かせていただいていますので、そちらもご参考にしていただければと思います。

・神学的な土台の確認

「あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい。」(エペソ 4:1)

まず、教会がどのような神学的土台に立っているかということを確認しておく必要があります。インターネットによって、教会の中にも様々な情報が入り込んできます。教会員が異なる潮流の神学的土台に立つ情報を流布したり、時にはその内容が異端的なものであったりするケースが起こってくるかもしれません。その時に、教会としてどこに立っているかということが明確になっている必要があります。

そこで問われるのが、礼拝における説教によって、教会がどこに立ち、どのような姿勢で、どこに向かっていくのかということが教会内で共有されているかということです。教会員が教会の神学的背景について詳細に理解しているということは困難だとしても、少なくとも異なるものに触れた時に違和感を覚えることができるように、福音をまっすぐに語る必要があります。

・誤りなき福音の前進という目的

「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。」(コリント第一 10:31)

特に教会がインターネットを用いて情報を発信する際には、発信の内容や仕方が誤りのない福音の前進という目的に沿っているかどうかを吟味する必要があります。あまりに内輪向きの発信の仕方になっていないか、教会がキリストと福音を隠すような発信内容になっていないか、その発信内容が他団体や誰かを批判したり傷つけたりするようなものになっていないか、そういったことに注意しなければなりません。

・キリストの受肉のインパクト

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」(ヨハネ 1:14)

教会が教会であるならば、教会を通して人となられた神なるキリストの体温を表すことを大切にしたいと思います。教会として、インターネットを大いに活用していきたいという機運があることは、とても良いことです。しかし、それと同時に、教会において共に集まることができることの喜びを提示することができるか、福音書においてイエスに手で触れられた、顔を見て語りかけられたという人々の喜びが教会の中にあるか、教会においてリアルな励まし合いと祈り合いがなされているか、そのことを大切にしたいと思います。

・教会員とその家族の生活を守る視点

「しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。」(ヤコブ 3:17)

教会としてインターネットを活用し、情報を発信していく際に、十分に気を付けておかなければならないことが、教会員とその家族、また教会に関わる方々のプライバシーや個人情報を守るということです。これは、教会の牧師や役員、あるいは教会員が、個人的なレベルでも気を付けている必要があります。教会から発信される内容が、あるいは教会の看板を背負って発信する内容が、教会としての守秘義務に反するものであったり、個人のプライバシーを侵害したりするものになっていないか、気を付けなければなりません。

6、個人における聖書的倫理観

続いて、個人的レベルでインターネットとどのように向き合うかということについて考えてみたいと思います。個人的なレベルでインターネットとの向き合い方を論じるのは、それぞれそれぞれの使い方や考え方も様々であるため、非常に難しいことです。これから、さらに議論され、整理されていくことを期待したいと思います。

・立っている土台の確認

「ただし、私たちは到達したところを基準にして進むべきです。」(ピリピ 3:16)

教会と同様、個人においても、やはり自分自身が立っている信仰的土台が重要になります。自分自身は、聖書を信仰と生活の唯一の規範として受け止めているか、神に愛されている存在として自分自身を受け止めているか、自分自身が罪を犯しやすい弱さを抱えている現実を認識しているか、イエス・キリストによって贖われている者として自分を受け止めているか、神を愛すると共に隣り人を愛する交わりに生きる者として自らを理解しているか、といった信仰の基礎となる部分も土台として必要です。なぜなら、サタンはインターネットを通してそこに付け込もうとする現実があるからです。

また、教会を通して自分に与えられている信仰の潮流や性格をある程度把握していることは、情報過多の中で自分自身の信仰を守る有効な手段となります。インターネット上の情報には、様々な神学的立場からの情報がほぼランダムに並んでいるような状態であり、それらを響きの良さだけで選んで取り入れると、知らない間に自分の信仰の柱がどこにあるのかがわからないという状態にもなりかねません。

・倫理的規範としての WWJD

「何が主に喜ばれることなのかを吟味しなさい。」(エペソ 5:10)

随分前から、クリスチャン界隈で“WWJD”という言葉が交わされるようになりました。WWJDとは、“What Would Jesus Do (イエスはどうか)”の頭文字をつなげたものです。私たちはクリスチャンとして、キリストに似た者となることを祈り求めている者です。インターネットを通して様々なことを見聞きした時に、あるいは自分自身が何らかの情報を発信する際に、イエス・キリストならどのようにされるだろうか、ということを考えることは、一つの規範となり得るものです。そのために、福音書を通して現わされているイエスの姿、イエスの視点、イエスが現わそうとされた世界観を見つめることは、私たちの信仰生活において大切なことです。

イエスの視点は、社会の中で小さくされている人々に希望の光をもたらすことにありました(ルカ 4:17~21)。私たちも、そのイエスの視点をもって世界を見ていきたいと思えます。ただし、インターネット上の世界は複雑です。現実世界の中でマジョリティであるか、マイノリティであるかということが、インターネット上でも同じようであるとは限りません。現実世界でマイノリティである人々が、SNS上で集結して一部の人に攻撃的な発信をするというようなケースも十分起こり得るのです。現実世界の中でマジョリティであるかマイノリティであるかというよりも、ネット社会の中でも声をあげることができないでいる人々がいます。そのような人の存在に目を留めることができるかどうかということが、イエスの視点を持つということの一面ではないかとも感じます。

イエス・キリストに似ること願う者として、自分がどのような情報を発信するか、どのようなことを“つぶやく”かということに、いつも注意していきたいと思えます。基本は、対面でのコミュニケーションです。実際のコミュニケーションで言うべきでないことが、インターネット上では言っても良いということはありません。「悪いことばをいっさい口から出してはいけません。むしろ、必要なときに、人の成長に役立つ言葉を語り、聞く人に恵みを与えなさい。」(エペソ 4:29)と書かれている言葉は、インターネット上での発信にも当てはまることです。

・余計な情報を受け流すというスキル

「愚かで無知な議論は、それが争いのもとであることを知っているのですから、避けなさい」(テモテ第二 2:23)

インターネット上には、情報が氾濫しています。その中で、自分に必要な情報、神の国を現すために有益な情報を選び取り、あとのものを見流すということをしなくてはなりません。これは、一つのスキルであると言えます。スキルですから、磨いていくことができるものです。最近では、ネットリテラシーという言葉も使われるようになりました。ネットリテラシーとは、「インターネットの便利さと脅威、ルールを理解し、適確な情報を利用して、よりよい情報発信をすることができる能力」(ネットリテラシー検定機構)を指す言葉で、特にネット上のデマやフェイクに惑わされずに情報を受け取ることや、正しい情報の発信をする能力を指します。すべての情報を真に受けずに冷静にインターネットの情報を眺めていると、デマやフェイクの情報にどのような特徴があるか、どのようなところにそういった情報が出やすいかということが、ある程度わかってき

ます。悪意のある情報を見た際には、それにかかわることはせずに、受け流す方が賢明です。また、自分と言う個人に対して悪意をもって近づいてくる人に対しても、相手にしないで受け流す心の余裕も大切です。

イエスは、悪意をもって近づいてくるパリサイ人や律法学者たちに対して、言葉巧みにはぐらかして、正面から相手にすることをしませんでした（例：マルコ 12:13～17）。相手を論破することがもてはやされる風潮がありますが、聖書は永遠に関わらないことに関して論破することについては否定的です。論破した時の快感は、自分の主張が否定されることの恐れに直結します。そのような状態では、健全なコミュニケーションは難しくなります。不要な情報や言葉を受け流すことが、自分を守ることになります。

・ディスカッションに必要なもの

「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味の効いたものであるようにしなさい。」（コロサイ 4:6）

インターネット上での健全なディスカッションは、非常に難しいものです。しかし、決してできないというわけではありません。どうしても議論することが必要な場合に、心に留めておくべきことがあります。第一に、言葉に体温を持たせるということです。つまり、発信する言葉に責任を持ち、相手に対する配慮を持ち、神の国の大使として遣わされている者としての言葉を発信するということです。そして、その際には、相手はその言葉を受け取った時にどのように感じるかということを考える想像力も必要です。

第二に共通の目的意識が必要です。その議論によって何をなすべきなのかという目的が、相手と一致していなければ、不毛な議論のままで終わってしまいます。その議論によって建て上げなければならないものがあるのであって、この議論はそれを建て上げるための相手との共同作業なのだという認識が互いになれば、建設的な議論にはなりません。共通の目的を見出すことができないならば、その議論は避けた方が良いものなのかもしれません。

7、おわりに

私たちは、神の国の民としてイエスによってこの世に遣わされている一人一人です。私たちがインターネット上でも神の国の民としてふさわしく振舞うことができるように、インターネットを通して私たちに触れあう人々が私たちの遣わされた者としての体温を感じることができるように、努めていたいと思います。そのために必要なことは、神が人となってこの地上に来てくださったというイエスの体温を感じることです。神であるお方が人の肌の温かさをもってこの地上に来て下さったということのインパクトを、私たちの隣り人と共有することです。

そのために、私たちが今置かれている教会において、福音を体験する機会を大切にしましょう。礼拝者として生きる生活を整えましょう。また、神が私たちの周囲に与えて下さっている一人一人とのあたたかな交わりを大切にしましょう。そこで養う一つ一つが、インターネットを利用する際にも大切なベースになっていきます。